

中国北方少数民族伝承文学概説（一）

— ウイグル木卡姆（上） —

高 橋 庸 一 郎

序

1995年、3月から6月まで新疆ウイグル自治区の区都ウルムチ市の新疆大学に滞在した。市の中心地区紅山公園、大十字商場あたりから新疆大学正門前に到る勝利路の丁度中間点ぐらいの所の西側に、古ぼけた白地に黒の字で、「十二木卡姆劇院」と書かれた看板が掲げられている所があった。是非一度この十二木卡姆というものを聞きたいと思って、その前を通る度に鉄製の檻状の門扉や塀に顔をくっつけて中をのぞいてみたりしたが、扉には大きな南京錠がいつもかかっており、中は白楊樹や榆の木、ライラックなどが鬱蒼と繁って、森閑としていた。このあたりはウルムチ市の中でも、ウイグル族の人が多く居住し、ウイグル色の濃いバザール、二道橋市場などを中心とした南部の旧市街に当り、モスク様の建物やウイグル族の所謂民族衣裳の一部である花帽、スカーフを売っている小さな商店が軒を連ね、ウイグル音楽のカセットテープ、またウイグル族の歌手や、民族音楽に合せて踊っている若者達をうつした壁掛け用の額入りの写真などを売る外、羊肉の串焼（シシカバブー）や羊頭をかかえて看板としている羊肉の蒸し焼き屋、その外ウイグル特有の美しい絵文様を柄にあしらった立派で大仰なナイフの露店などがひしめきあっている所である。このにぎやかな歩道を持つ大通りに面しながら、この十二木卡姆劇院だけは多くの露店の陰に追いやられて、ヒっそりとかすんでいるのである。この一角で涼皮という澱粉で作った麺や、羊羹状の澱粉ゼリーを売っていた色あざやかなウイグル^{がすり}餅の中年婦人に、「この劇院はいつ開いて

いるのか？」と聞くと、「オヤ、こんな所にこんな劇院があったなんて、いままで気がつかなかったよ。サア、ここで商売をはじめてかれこれ五年にもなるけど……、この門が開いているのは見たことがないね」というのである。なる程そう言われてみれば、この看板は文字も殆んど消えかかっている、よほどの好きに目を凝らして見ないと読めないかもしれない。しかしこのウイグル婦人は、このウイグル文字でない漢字にむしろ興味がなかったのであろう。新疆大学に帰って、外事弁公室の満沢先生にそのことを聞いてみると、「7、8年前まではたしかやっていたようだけど、最近はやっているという話は聞いたことがない。いまやってもお金を出して聞きに行く人はいないでしょうからね。ウイグル族でも特に都会の若い人には、ディスコや大学で学生達が主催してやるダンスパーティの方がずっと人気があるようですからね」というのであった。ウルムチの交通、ホテル、観光地、文化娛樂場などを紹介したパンフレット『新疆百事通』にも、映画館、劇場、歌舞庁、倶楽部の名前はたくさん記されていたが、この十二木卡姆劇院の名はもう載ってはいなかった。

5月の末に、新疆大学外弁のウイグル族青年職員ヘルハット君とカシガルへ旅をした。この町の東洋一といわれる大バザールの一角で回教徒の白い帽子を被った足の悪い老人が、タンブールという竿の恐しく長い五絃の楽器をかきながら、メラシのきいたよく通る声で、歌い語るのを聞いた。そばにいたヘルハット君が、「これが十二ムカムですよ、セナムです」と言

った。セナムというのは十二ムカムの一部で、恋の歌である。悲しいような、しかしまた楽しいような、それこそ人生その時々に出遇う感情の機微をそのまま音楽にしたといったその演奏とメロディには、ウイグル語の歌詞を解せない身にも、深く心打たれるものがあつた。

同行のヘルハット君はカシガル出身で、同市の高校を出ていたから、久しぶりだということで彼の高校の同窓が17、8人彼の為と、日本からの遠来の客を歓迎する為に、サマンホテルの葡萄棚の下で宴を開いてくれた。その中にも二人の楽師がいた。一人はタンブールを、もう一人は二絃のドタールという楽器を抱えていた。ここでも二人はムカムの演奏からはじめた。集った若者達も「西天山特曲」という四十六度の酒をあおりながらうたい出し、そして踊りはじめた、実ににぎやかなうたげとなった。宴もたけなわとなった頃、楽師達は即興の歌をうたいはじめ、一節終るたびに皆がドッと笑って大いに涌く。どんな歌詞がおもしろくて皆これほど笑うのかと、隣の青年に、「漢語に訳してくれないか」というと、その青年はしばらくまじめな顔をして頭をひねっていたが、やがてニヤニヤしながら、「ちょっときわど過ぎて、とても訳せませんよ」というのであった。後で解ったことであるが、ムカムにとっては、即興部分も重要な一部なのである。

ムカムはカシガルからの帰り、クチャのバザールでも聞いた。ウルムチのような大都会では風前の灯であるウイグルムカムも、カシガルやクチャのような、タクラマカン周辺のオアシス小都市では、細々ながらまだ生きているのであつた。

因みに、ウルムチでは一度だけムカムを聞いた事がある。新疆大学の南にある遊園地、ウルムチ水上樂園から動物園の方へ向う新華路で一軒の清真餐厅（回教徒用の食堂）の新装開店があり、そのお祝いにやって来た楽隊（日本のチンドン屋に当る職業）で、といっても三人で、一人はタンブール、一人はソナイというチャルメラ、もう一人はダップという平太鼓を半分に

切つたような打楽器である。彼等が調子よく奏でたのもムカムで、この時のその食堂の主人が店の前で一人で踊っていた。こぶしを握った両腕を肩の高さに横に真直に伸ばし、時にその腕を片方或いは両方とも胸の内側に屈曲させて、足は膝とかかどを使って片方ずつピョコピョコと調子を取りながら踊るのである。それを取り囲んで見物する人は男女あわせて20人ぐらいのウイグル族ばかりであつたが、加わって一緒に踊ろうとする人はいなかった。あたりがうす暗くなりかけたウチムチの町はずれの小さな食堂の前、些か寂しげな電飾の下で、主人は真剣な面もちで、タンブールを抱えた男の歌声に合せて、いつまでもいつまでも踊っていた。

1. 木卡姆（ムカム）の種類と構造

木卡姆は、「馬卡姆」或いは「瑪卡姆」とも表記され、アラビア語にその語源が求められるという。ウイグル語としてのムカムは、ウイグル族のある一種の伝統的民間伝承音楽詩曲を表わす語で、それは楽器の演奏、或いは伴奏を含む歌曲であり、更に舞踏もふくめて考えられるのが普通である。ただこのムカムの全量は膨大で、一般的には12の組曲からなり、それぞれの組曲は、歌曲、舞曲、組歌などで構成され、全部で約340余首を包括したものである。詩歌の内容は豊富多彩で、一人身をかこち嘆くもの、恋の喜びを歌うもの、失恋の悲哀、求婚の歌、また労働や収穫のよろこび、苛酷な労働と理不尽な支配者への怒り、大自然の美しさをうたったものなどがあり、その他ウイグル族自身の歴史的な事象を歌った叙事詩的なものも包摂している。1991年新疆人民出版社から出版された『維吾爾族簡史』には、「十二木卡姆」の定義として、「一つの膨大な、完成された、ウイグル族の数百年に亘る闘争生活と、その所有する民族芸術形式をすべて概括した音楽史詩」としている所からも、史的要素が強いということが解る。更にムカムの実際の演奏に当っては、その場の情況、雰囲気、環境に合せた即興詩が、参集者達の心を高揚させ、お互いに引き込ませ、

全体の一体感を盛り上げるという点で重要な役割りを果たすのである。しかし今のところ非常に残念ながら、このムカムの全体が録画、録音などを通じて収録されたことがなく、また当然詩の内容が漢語に翻訳されたこともない。故にムカムの断片的な姿から垣間みえる特徴は知ることが出来ても、その全容から判断される特質を明かにすることは出来ない。いずれにせよ現在解っていることの一つは、ムカムというのはモスリム世界に発生し、沙漠のオアシス地区のみで発展し定着した極めて特色ある音楽舞踏現象であるということである。

新疆ウイグル自治区及びその周辺地域に伝えられている木卡姆で、いま知られているのは、『十二木卡姆』（『喀什木卡姆』とも言われる）、『哈密木卡姆』、『多朗木卡姆』（『刀朗木卡姆』或いは『吐魯番木卡姆』とも言われる）、『伊犁木卡姆』のほぼ四種である。『十二木卡姆』は、ウイグルムカムの中でも最も整った代表的なもので、流伝している主な地域は、タリム盆地の南、西、或いは西北の縁に沿って点在する地区で、庫車、阿克蘇、喀什、和田などの都市がふくまれる。『哈密木卡姆』はいうまでもなく、新疆地区の西寄りの哈密地方であり、『多朗木卡姆』は、ウルムチの東南、吐魯番地区である。また『伊犁木卡姆』の流伝地は、主にジュンガル盆地の西南、タリム盆地西北の伊犁地区である。

『十二木卡姆』は、その名称からもうかがえるように、12部の大型合曲からなる壮大なもので、中国の研究者達は、その全体を套曲と呼んでいる。套というのは、いくつかの部分が合さって形成されている所の、ある完整され、まとまった一つのものという意味である。この12部の合曲の名称は、人によって呼び方、記述法が若干異なるが、掲げてみると略つぎのようである。

- (1) 拉克木卡姆 RAK
- (2) 且比亞特木卡姆（切比西特とも言う）
(CHABBIAT)

- (3) 木夏烏熱克木卡姆（穆夏威萊克とも言う）(MUSHAUIRAK)
- (4) 恰爾尕木卡姆 (CHARIGAH)
- (5) 潘吉尕木卡姆 (PANJIGAH)
- (6) 烏扎勒木卡姆（烏孜哈勒とも言う）
(OZ'HAL)
- (7) 艾介姆木卡姆 (AJAM)
- (8) 烏夏克木卡姆 (OSHSHAQ)
- (9) 巴雅特木卡姆（巴亜特とも言う）
(BAYAT)
- (10) 納瓦木卡姆 (NAWA)
- (11) 西尕木卡姆（賽尕とも言う）(XIGAH)
- (12) 依拉克木卡姆（伊拉克とも言う）
(IRAQ)

また(2)を恰比亞特、(3)を木夏未熱克と表記する人もある。

ムカムの研究家周吉氏によれば、以上の12のムカムの中の一つ一つのムカムは、それぞれ、「散板序」、「穹乃額曼」、「達斯坦」、「麦西熱甫」に分かれ、全体的には、叙誦歌曲、叙事歌曲、器楽曲、歌舞曲など、多種の体裁の楽曲20数曲をふくんでいるという。また西域文化研究家の周菁葆氏によれば、12のムカムのうちのそれぞれのムカムは、(一) 琼拉克曼、(二) 達斯坦、(三) 麦西熱甫の三つの部分からなり、琼拉克曼は、4曲から11曲の歌と、2曲から6曲の間奏曲からなっている。『達斯坦』は、3、4曲の歌曲と、3、4曲の楽曲から構成された叙事曲からなり、また『麦西熱甫』は2曲から7曲の歌曲によって構成された歌舞組曲である。そしてこの『十二木卡姆』と呼ばれる一大套曲は、全体で179曲の歌曲と歌舞曲、更に72曲の器楽間奏曲からなっており、10曲の演奏に約一時間要するとして、全曲の演奏にはほぼ24、5時間かかるというのである。

また周菁葆氏の指摘によれば、『喀什木卡姆』の中の『琼拉克曼』の構造は、

- | | |
|---------|----------------------|
| 一. 歌曲部分 | 序唱——太孜——怒斯赫——小賽勒克……。 |
| 二. 解曲部分 | 太孜間奏曲——怒斯赫間奏曲——小賽勒克間 |

奏曲……。

三. 舞曲部分 朱拉——賽乃姆——帕西路——太喀特……。

となっており、一の歌曲部分と、二の解曲部分は交替しながら進行することが多いという。つまり解曲部分というのは本曲と本曲との間に奏される間奏曲で、時によってはこの間奏曲の間に、アクロバットのな見世物や、たくさん的小鉢やコップを頭にのせて踊る雑技風の演目が入ることもあるという事を、ウイグル族の青年から聞いたことがある。いま琼拉克曼全体の流れを追ってみると次のようである。

散序——太孜——太孜間奏曲——怒斯赫——怒斯赫間奏曲——小賽勒克——小賽勒克間奏曲——朱拉——賽乃姆——大賽勒克——帕西路——帕西路間奏曲——太喀特

といった具合である。感情の深い沈んだメロディの散序唱からはじまり、つづいて太孜へつながら、怒斯赫、小賽勒克、朱拉を一気に登りつめ、そのままクライマックスの賽乃姆と大賽勒克に到って興奮が最高潮となり、最後に軽やかな太喀特で終るのである。それを周菁葆氏は、

深沈——展開——興奮——解放
と表わしている。

ここに言う「賽乃姆」というのは、その発音から判断して恐らく所謂「セナム」のことであろう。1979年10月、NHKのシルクロード取材班がクチャで取材した時のことが日本放送出版協会が昭和56年1月に出版した『天山南路の旅』という書にかかれており、そこでウイグル族の舞踊歌曲として言及されている「クチャ・セナム」と同一のものと思われる。もともと歴史的伝統音楽である龜茲(キジル)楽の中にあったものが、クチャ民族伝統歌舞曲として受け継がれ、更にそれがいつしか『十二木卡姆』の中に位置を占めるようになったものと考えられる。しかしこのセナムは、「ギジル楽」のセナムとは全く同じものではないであろう。一つの曲は何百年という長い演奏の歴史的過程の中で徐々に変化していったことであろうから、最終的に

はその変化は相当大きなものとなったにちがいない。NHK取材班によると、セナムとは美しい娘の名前であるという。前掲書にはその時の舞踊曲につけられた歌詞が収録されているのでここに引用してみると、

高く青い山並の果て
白銀は山頂に輝く
喜びにあふれた愛は、既になく
あなたは去り、もう、帰ってこない
誰もが私を出戻りだと噂する
だけど、私は気にしない
たとえ鞭で八十回打たれようとも
私はあなたのもの
いつまでも、いつまでも

このセナムは、カシガルのバザールで老人が歌っていたものとは少し異なるように思われる。同行のウイグル青年の通訳では、逢瀬の喜びがもっと濃厚であったような気がする。つまり「セナム」というのは、歌詞の名ではなく曲の名なのかもしれない。漢代から六朝にかけて中国で作られた楽府の名、即ち楽府題のようなものかもしれない。恐らくセナムと名づけられた歌詞、歌詩は多く存在するのであろう。或いはその場で即興で作るうたうものもあるのであろう。『十二木卡姆』の中のセナムは、もう楽府題的なものも通りこして、ムカムという套曲の中のある位置をしめる曲につけられた構造の名ともなっているのである。別な角度から言えば、このように『十二木卡姆』の中の各楽曲、歌曲、舞曲はそれぞれ独立して奏せられたり、歌われたり、踊られたりもするということである。洋楽オペラの中の歌曲や、間奏曲などと同じように、ムカムの中の一つ一つの部分は内容的にも旋律的にも独立して完整したものとして扱うことが出来るのである。オペラは一人の人が全体の筋立ての配列に従って作曲、作詩していくのであるが、ムカムは恐らく伝世伝承の歌曲、舞曲を組み合わせ一つの套曲としたのであろうから、オペラの場合より一層各曲の独立性は強いはずである。

ムカムの第三番目の構成部分である、「麦西

熱甫」は、「マシュラップ」のことで、これもNHK取材班によれば、二百年前、ウイグル族にあらわれた非常に高名な詩人の名であるという。つまりこの曲はマシュラップのつくった詩に当時の人々が曲をつけて歌い踊ったものなのである。そしてこれも今では豊作の喜びをうたう歌は一般にマシュラップと呼ばれているのである。マシュラップもムカムの中では楽府題的なものか、或いは更にムカムの構造上の位置曲を表わす名となっていると言えるのである。

『十二木卡姆』の漢語訳は1992年6月に、新疆人民出版社から、井亜沢の「十二木卡姆歌詞選」という小版の書が出ただけである。木卡姆の叙事歌辞の部分が見れば、木卡姆についても、ウイグル族の歴史についても更に解明出来る事柄が多くなるにちがいない。

『哈密木卡姆』も12の合曲によって構成されているが『十二木卡姆』とは呼ばれない。哈密木卡姆の中の各合曲の名称は次のようであるが、これも人によってよび方が異なるようなので二種類掲げ、更に哈密地方の方言としての呼び方（土名）もあるようなのでそれも掲げておく。

宋沛の分類	司馬義・鉄木爾の分類	その土名
(1)玉爾頓・阿来姆尼	都爾	玉爾頓・阿来姆尼
(2)牙欧斯・吐龍木	烏魯克都爾	哈咿・哈咿・玉蘭
(3)海・海・月蘭	穆斯台扎特	亜勒吾茲・托云
(4)恰爾尕	恰爾尕	——
(5)加尼開姆	胡甫提	——
(6)薩依龍・布魯・布魯	切比亞特	加尼凱姆
(7)代地里瓦	穆夏威萊克	代爾丁盖・達尕
(8)刀朗	烏孜哈勒	代爾迪尼瓦
(9)代爾登亜芒	都阿	(小)代爾丁・亜曼
(10)忽菩提	刀朗穆夏威萊克	——
(11)唐賽哈了	伊拉克	(大)代爾丁・亜曼
(12)代爾登達尕	拉克	薩依朗・布爾・布爾

これで見ると宋沛氏の分類と司馬義・鉄木爾氏の分類には出入りがあることがよく解る。例えば宋沛氏の（3）海・海・月蘭と、司馬義氏

の（2）の土名、哈咿・哈咿・玉蘭は全く同じものであるし、同じく宋沛氏の（5）加尼開姆は、司馬義氏の（6）土名の加尼凱姆と全く同じものである。その他宋沛氏の（6）薩依龍・布魯・布魯、（7）の代地里瓦、（9）の代爾登亜芒、（10）の忽菩提、（12）の代爾登達尕は、それぞれ司馬義氏の土名（12）の薩依朗・布爾・布爾、土名（8）の代爾迪尼瓦、土名（9）（11）の（小）（大）代爾丁・亜曼であり、（5）の胡甫提と同じものである。また宋沛氏の（2）の牙欧斯・吐龍木は、司馬義氏の土名（3）の亜勒吾茲・托云と同じものかもしれない。即ちここから解るように哈密木卡姆の中の合曲の演奏順序は必ずしも一般に固定化され定式化されるものではなく、時により、人により地方によって微妙に異っているということである。つまりそれだけ『十二木卡姆』より素朴で自由さが残っているといえるであろう。それとこの哈密木卡姆には、十二木卡姆（喀什木卡姆）と同名のものが中に入っている。例えば十二木卡姆の（1）拉克、（2）恰比亞特、（3）木夏末熱克、（4）恰爾尕、（6）烏扎勒、（12）依拉克は、それぞれ哈密木卡姆の中の（12）拉克、（6）の切比亞特、（7）の穆夏威萊克、（4）の恰爾尕、（8）の烏孜哈勒、（11）の伊拉克と同名のものである。これ等はその流伝の地が相互に大きく離れていることによって、実際の演奏に当っては、その演奏方法、使用される楽器、歌われる歌辞、或いはそれに振り付けられる舞踏などは異っているにちがいない。しかしこの名称に同じものが多いということは、哈密木卡姆が、西方の木卡姆の伝入の上に成立しているということである。西方の木卡姆の基礎はとりもなおさず龜茲樂であり、その発展の結果が喀什木卡姆である。しかし哈密木卡姆の中には土名が多く残っており、それが土名としてではなく正式名称の中にも多くとり入れられているという事実は、哈密木卡姆の実際の成立母体は、哈密地方の民間歌謡であったということを示唆している。

司馬義氏は哈密木卡姆について、そこには24の章、360の曲調があり、いま残っているのは

十九の章、262の曲調であるとし、「烏魯克都爾」「都阿」「拉克」「伊拉克」「刀朗穆夏威萊克」などの木卡姆の第二章と一部分の曲調がすでに失われていると述べている。また全体の曲の流れとしては、木卡姆部分（哈密木卡姆では大体三つの部分に分かれていて、哈密地方特有の楽器艾捷克（ハミアイティク）の伴奏による散板序唱をムカムと称している）、歌曲部分、歌舞曲部からなり、はじめは短章の序曲で、つづいて深静、軽快、沈低な麦西萊甫（マシュラップ）楽曲があり、最後に調子の速い楽しいで、興奮を盛り上げるような賽乃姆（セナム）楽曲となって最高潮に到るのである。

哈密木卡姆の歌辞は、基本的には古典詩人のものはなく、地方色豊かな民歌、民謡の類がそのベースとなっている。その為に『十二木卡姆』の持っているような、或る意味では歴史的年輪を経て来たと思わせるような、意味深長な、或いは宗教的な意味合いを持ったような歌辞が極めて少ないといわれる。

我打算離開你遠走高飛

私はあなから離れて遠くへ飛んでゆく
沿着你家果園中的小徑

あなたの家の畑の小道を走りて
和你在麦西萊甫上時時相会

あなたと麦西萊甫の時に会いましょう
給你的心田里留下了傷痕

あなたの心の畑の中に私のいたむ心の足跡を残しておきたい

紫羔皮做的大衣

黒い羊の皮で作った上着

寒冬季節穿着舒服

冬の寒い季節に着ればあったかい

有情有意の人兒

私の恋しい人よ

麦西萊甫上親着舒服

麦西萊甫の時に着せてあたためてあげる

麦西萊甫は、「十二木卡姆」の所で述べたようにウイグル族の伝説的詩人の名であるが、こ

こでは、豊作を祝う踊りという意味から、その祝いをみんなで歌い踊る場と時を表わす意味に変わって来ている。

但願夜晚永是夜晚

夜はいつまでも永い夜であってほしい

但願白天也是夜晚

お昼間もみんな夜だったらどんなにいいかしら

願我和情人相会的時刻

私と恋しい人が会う時は

是一个永不天亮的夜晚

明けることのない夜であってほしい

哈密木卡姆には叙事的歌辞、歴史性を帯びた歌辞はないようである。哈密木卡姆は、十二木卡姆よりずっと素朴で、素直で朗らかである。哈密はいまでも、すぐにも沙漠に埋れてしまいそうな厳しい環境の小さな町である。昔しの旅人は、もえるような灼熱の太陽と砂の中を渴にやっと耐えながらこの町にたどりついたのであろう。そこでは人々は、喉と心の渴を癒す事に生命の喜びを見出したにちがいない。そうした旅人を迎え送り出し、そして我身もその喜びに浸るのに最もふさわしい方法は、素直にしてあげつろげな歌であり、踊りであり、音楽なのである。哈密木卡姆はまさしくそうした心の高揚の中で仕込まれ、発酵し、醸造されたうま酒なのである。

ウイグルムカムの中で多朗木卡姆は比較的古く、比較的原始的で、比較的古朴であると言われているが、その内容はあまり解っていない。現在わかっている多朗木卡姆の合曲は9曲である。

(1) 茲里巴牙宛木卡姆

(2) 烏茲哈勒木卡姆

(3) 拉克木卡姆

(4) 木夏烏熱克木卡姆

(5) 崩比亞宛木卡姆

(6) 朱拉木卡姆

(7) 森比亞宛木卡姆

(8) 胡代克木卡姆

(9) 都尕買提木卡姆

これらのうち、(2) の烏茲哈勒、(3) 拉克、(4) 木夏烏熱克、はそれぞれ、喀什木卡姆 (6) の烏扎勒、(1) の拉克、(3) の木夏末熱克と同じものであろうし、(6) の朱拉は、「十二木卡姆」の中の琼拉克曼の舞曲部分中の朱拉と一致している。このことから多朗木卡姆も喀什木卡姆からの強い影響を受けているということがわかる。

蒙古族の木卡姆研究家、王秀蘭氏は、『清史稿』巻百十の中に記載されている、「高宗回部を平定し、其の樂を得、宴樂の末に列す。是れ回部樂技と為す。達卜一、那噶喇一、哈爾扎克一、喀爾奈、塞他爾一、喇巴卜一、巴拉滿一、蘇爾奈一を用う」の「回部樂」というのは多朗木卡姆音楽を指しており、また『清史稿』の、「回部樂曲一章、思那滿、塞勒喀思、察罕、珠魯」という記述からみれば、これも多朗木卡姆の曲名を指しているものとしている。その理由として、塞勒喀思は、塞乃克斯（多朗木卡姆の曲名）のことであり、思那曼もまた塞乃曼（これも多朗木卡姆の曲名）のことであり、珠魯も朱拉（これも多朗木卡姆の曲名）のことであるからであると述べている。しかし、塞勒喀思は、劉志霄氏がまとめた叶爾羌汗国の木卡姆に「依西來特、安格孜」と呼ばれているものがあり、恐らくこれと同名のものであろうと思われるし、思那曼は十二木卡姆の琼拉克曼の中の舞曲部分の賽乃姆（セナム）のことと思われる。また朱魯は、上文に述べた舞曲部分にも朱拉があるから、これだけをもって「清史稿」に記されている回部樂が、多朗木卡姆を指していると断定するのは危険であろうと思われる。またこの多朗木卡姆が現在 9 合曲しか残っていないのは、昔しは 12 曲そろっていたのが、そのうち 3 合曲が失われたからであるとするのが一般的論

説に見えるのであるが、しかし劉志霄氏は、そうではなく多朗木卡姆はもともと最初から 9 合曲しかなかったのだという説を立てている。その理由に、9 という数字を重んじるシャーマン文化の影響が働いているとするのである。この理由の当否は今問わないとしてもその結論は耳を傾けるものがあると思われる。例えば哈密木卡姆の土名は 9 しか残っていない。これは哈密木卡姆が最初は 9 ぐらいであったものが、喀什木卡姆から他の木卡姆を取り込んで 12 になっているように思えるからである。

「伊犁木卡姆」については、その存在が知られているだけで、詳しい内容については全くわかっていないようである。

木卡姆の歴史とその使用される楽器の歴史の変遷については別稿にゆずる。

参考文献

- 『中国百科全書、民族』
- 『維吾爾族簡史』編集委員会、『維吾爾族簡史』新疆人民出版社。
- 阿、吾鉄庫爾（維吾爾族）「試論維吾爾《十二木卡姆》与阿拉伯音樂文化的關係」『西域研究』1991 年第 4 期。
- 周吉「維吾爾族《十二木卡姆》十題」『新疆師範大學學報』1994 年第 4 期。
- 司馬義・鉄木爾（維吾爾族）「哈密木卡姆簡論」『西域研究』1993 年第 4 期。
- 劉志霄「叶爾羌汗国与《木卡姆》」『西域研究』1993 年第 1 期。
- 宋沛「維吾爾喀什木卡姆与哈密木卡姆之比較」『新疆師範大學學報』1995 年第 1 期。
- 王秀蘭（蒙古族）「多朗木卡姆与薩滿文化」『西域研究』1993 年第 1 期。
- 周青葆『絲綢之路芸術研究 絲綢之路研究叢書四』新疆人民出版社。
- NHK取材班『天山南路の旅シルクロード第五巻』日本放送協会。
- 『新疆の旅』中国人民美術出版社、(株)美乃美。

(1996年10月14日受理)